

善を共有することについての一考察

著者	亀喜 信
引用	大阪府立大学紀要（人文・社会科学）. 2012, 60, p.1-8
URL	http://doi.org/10.24729/00006065

善を共有することについての一考察

亀 喜 信

本論文は、「善を共有する」とはいかなることか、それは現代の社会でどのような意義をもちうるかを検討する。西洋哲学の歴史のなかで、「共通善」という思想は古くから論じられているようだが、本論文はこの概念を歴史的に辿り、検討することを目的とするものではない。

善を共有することは、まず、特定の個人の主観的な善とは異なるものとして理解される。そして本論文では、人々があるものを共通して善と見なしているという事実だけでは、その善が共有されているとは見なさない。例えば、どの人も健康を善と見なしており、その点で共通しているとしても、健康が共有されているとは見なさない。健康はあくまでそれぞれの個人の善であって、個人を越えた健康なるものがあって、それを人々で分け合うわけではない。健康という善にとって、それがすべての人に共有されていることは関係がない。ある善は、人びとによって共有されていることが深く関わっている。それはちょうど、言葉というものが個人を越えたものであり、個人の自由にならないものであると同時に、人々によって共有され、人々のものの考え方や感じ方、生活にまで影響を与えるようなものである。本論文で扱う善は、共有されることがその内容とはたらきに深く関わっている善である。そのような善をどのように理解することができるのか、そして現代の社会で善を共有することがどのような意義をもちうるか、以下検討する。

1. 相互の尊重

善を共有するという思想は、共同体主義に固有のものではない。ジョン・ロールズは、『正義論』(1971)のなかで、基本的善(primary goods)の一つとして「自尊心(self-respect)を挙げているが、この自尊心をもとに、善を共有することについて考えてみる。

ロールズによれば、自尊心とは自分自身の価値(worth, value)の感覚であり、自分の善の構想ないし生の計画が行うに値するという感覚である。そしてロールズは、自尊心は他者から尊重されることに基づくと考える¹⁾。自分や自分の行うことが、どの人からも無視され、軽蔑されていると感じれば、自尊心は崩れてしまう。自尊心がなければ、人はどんな願望も行いも虚しいと感じ、無気力(apathy)に陥る。そこからロールズは、最も重要な基本財はおそらく自尊心であると主張する。そして彼の言う原初状態において、人々はどんな代価を払っても、自尊心を損なうような社会的条件を回避したいと願うだろうと論じる(TJ,386)。人は、いくら平等な権利を認められ、豊かな財産や才能に恵まれていても、他者から認められなければ無

¹⁾ John Rawls, *A theory of justice*, revised edition, Harvard University Press, 1999, pp.155, 386. 以下 TJ と略し、本文中の () 内に略号とページ数を記す。

気力に陥り、自分は誰からも必要とされない余計者だと思ってしまう。この指摘は重要なものである。大衆社会において、特に大都市において、人々の関係が断片化され、とりわけ失業した人々や安定した職を持たない人々は、自分が社会から必要とされていないという感覚をいだきやすい。自分が社会から見捨てられているという思いに捕らわれている人々の不満や絶望に対して、いかにして自尊心という基本財を確保するかは、重要な問題である。

人間が自尊心という最も重要な基本財を失わないために、原初状態にある人々は「相互の尊重」(mutual respect)という「自然な義務」(natural duty)を受け入れるとロールズは述べる。彼の言う「相互の尊重」は二つの契機を持ち、一つは他者の視点(他者が善を理解する見地)に進んで立ち、そこから他者の状況を見ること。もう一つは、自分の行為が他者の利害に関わる時は、自分の行為の理由を進んで他者に説明することである(TJ,297)。他者を尊重するとは、自分の行いが他者の利害にも関わる場合、その行いの理由が、他者の視点に立って理解することができ、受け入れられるものでなければならないということである。人びとが相互に尊重しあう社会で、人は自分が無視されていないと感じ、自分の理解する善を実現する意欲を持ち続けることができる。ロールズの正義論は、契約説に立つものと理解されるが、ここで相互の尊重が「自然な義務」と言われるのは、それが契約という人為に基づく義務ではないという意味である。つまり、お互い尊重した方が互いの利益になるという計算によって、互いの合意によって結ばれる交換の契約、give and takeではないということである。たとえ相手が自分を尊重しておらず、「自然の義務」に反していても、自分は相手を尊重しなければならない。基本財を配分するための公正なルールは、人びとの契約によって決められるとしても、人々が互いに尊重し合うべきであることは、契約以前の「自然な」義務である、とロールズは考える。

そしてロールズは、『公正としての正義 再説』(2001)において、社会を「社会的協働の公正なシステム」(a fair system of social cooperation)として理解し、そこから政治的構想を打ち立てる「公正としての正義」を提示する²⁾。つまり社会的協働に焦点が合わされ、そこでの正義が問題とされる。そして、社会の協働する構成員としての「市民」が必要とするものとして、基本財が位置づけられる(JF,58)。それにより、基本財としての自尊心は、自分自身に対する主観的態度の問題ではなく、平等な権利を持つという制度的事実、その事実を人びとが公的に認めていることなど、自尊心を支える社会的基盤の問題へと位相を移される(JF,60)。このように社会的協働を担う市民へと焦点が移動するに伴い、「互惠性」(reciprocity)という概念も異なる観点から重要となる。すでに『正義論』において、格差原理が互惠性のひとつの構想を表すものであり、相互便益の原理であると論じられていた(TJ,88)。しかし『公正としての正義』においては、互惠性は市民のあいだに相互的信頼を促進し、自発的な社会的協働に必要な心の態度と習慣を促進すると主張されるに至る(JF,117)。単に、すべての人に必要な生活費を保障するだけの福祉政策では不十分である。むしろすべての人が社会的協働に参加し、

²⁾ John Rawls, *Justice as Fairness, A restatement*, edited by Erin Kelly, Harvard University Press, 2001, p. 61. 以下 JF と略し、本文中の () 内に略号とページ数を記す。

政治社会の構成員として、自分の分担する役割を十分に果たすことのできる社会的基盤が必要である。それによって人は「市民としての自尊心」を持って生きることができる。

以上見てきたように、相互的な尊重は、人々が人間としてまた市民として、自尊心をもって生きることを支えるものであり、人々が共有する善であると言える³⁾。人は、誰からも必要とされず、認められてもいないと感じるとき、自分を余計者と感じ、失望して無気力に陥りやすい。単に必要な生活費だけを保障すれば済むのではない。その観点からロールズは、福祉国家資本主義を批判し、財産所有の民主主義 (property-owning democracy) を提案するが、本論文ではこの点には立ち入らない (JF,139-140)。

2. 複数性と一体性

ロールズの場合、善は個人と個人のあいだの相互的なものとして共有される。しかしロールズを批判するマイケル・サンデルの場合、個人を越えた「共同体の善」を共有することが重視される。彼は『リベラリズムと正義の限界』において、ロールズの想定する「協働する主体」が、共同体に先立って個体化 (individuation) されていることを批判している⁴⁾。サンデルは、個人は共同体に先行するものではないことを強調し、共同体がひとの自己理解の様式を表し (describe)、ひとのアイデンティティを部分的に形作っている (constitutive) と論じる (LJ,150)。また彼は、ひとが共同体に対して抱くことのできる愛 (attachment) は、そのひとが持つ価値観や感情を越えて、そのひとのアイデンティティそのものを引き込む (engage) ことができると考えている。そしてロールズの想定するような独立した自己は、そのような共同体への愛を抱くことができないと批判する (LJ,62)。サンデルの「共通善」 (common good) は、個人と個人の相互性のうちではなく、個人を越えた共同体のうちに位置づけられる。人々は共同体を愛し、共同体に参加し (participate)、そして共有する (share)。それゆえ彼は、互惠性と共有とを対比させ、互惠性は交換の原理と人びとの複数性を含むが、共有することは交換を含まず、連帯を指し示すと論じる。互惠性や社会的協働は、あくまで独立した複数の個人の相互的／水平的な関係である。しかし共同体に対しては、人々は部分的に依存的であり、共同体の善を共有することで、人々は部分的にではあっても「一つになる」ことができる。ここに、複数性 (plurality) と一性 (unity) という対立軸が現れる。

もちろん、共同体や「共同体の善」が人々のアイデンティティを全体的に決めてしまうわけではない。また共同体が人々のアイデンティティを部分的に構成するとしても、それは二度と変えられないような仕方で、決定的／最終的 (definitive) に固定してしまうわけではないだろう。共同体の在り方や共同体の善について、人々が批判的に反省し、場合によっては改めるということは可能であろう。そしてその反省によって、人びとが自己理解を見直していくことも

³⁾ ロールズは「共通善」 (common good) を、「すべての人に等しく有利となる一般的条件」と規定している。(TJ,217)

⁴⁾ Michael J. Sandel, *Liberalism and the Limits of Justice*, second edition, 1998[1992], Cambridge University Press, p. 149. 以下LJと略し、本文中の()内に略号とページ数を記す。

可能であろう (LJ,172) ⁵⁾。ただ、その深く反省していく主体は、共同体に先行するようなデカルト的な主体ではなく、共同体によって部分的に構成されつつ互いに反省を深めていく、解釈学的な循環のうちに共に生きる主体の共同体ではあろう。

サンデルは『公共哲学』というタイトルの論文集で、共和主義に基づく自由について論じている。共同体に参加することは、自治への参加として理解されれば、共和主義に結びつく。それは仲間と共通善について熟議を行い、自分たちの手で政治的共同体の運命を作っていくことである⁶⁾。しかし「熟議」(deliberation)とは、対立や複数性があるのはじめて活性化するのであり、単純な unity では成り立たない。そしてなにより熟議とは、コミュニケーションを通じて選好への反省を促し、選好が変わる可能性を開くものである⁷⁾。特定の共同体の善を、絶対不可侵の価値として疑わず、譲らない人は、熟議などできない。そして共同体への愛による感情的なつながり、一体感あるいは依存関係に伴う情念は、時に人々の批判精神を麻痺させ、パラノイア的な妄想 (obsession) となる恐れがあることは否定できない。共同体が人々のアイデンティティを部分的に構成するはたらきが、自我を圧倒するほど強く全体的となり、逆にアイデンティティを破壊することのないように、人々の反省と熟議という契機が重要である。サンデル自身、現代に特有の市民的徳として、「重なり合ったり反発しあったりする義務のなかで、自分たちの方法を話し合っ取り決める (negotiate) 能力」、そして「複数の忠誠が引き起こす緊張とともに生きる能力」を挙げている (PF,34)。共同体が人々のアイデンティティを部分的に形作るとしても、それは人々が互いを尊重し合う複数性と互惠性を否定するものであってはならない。

またロールズの言う相互の尊重も、「自分の行為が他者の利害に関わるとき、自分の行為の理由を進んで他者に説明する」ということであるから、人々が自分の利害にしか関わらない事柄に閉じこもってしまえば、相互の尊重は実際にはたらく機会がなくなる。相互の尊重が「自然の義務」であるとしても、それは複数の人々の利害に関わる事柄、とりわけ公共の事柄に参加するという実践があつて、はじめて実際にはたらく義務である。ここから、人間は公共の事柄すなわち政治に参加することにより、共有された善を実現することができるのであり、それによって人間は自己実現を果たすことができるという、perfectionism の考え方も生まれる。しかし本論文では perfectionism には立ち入らない。

人間の自尊心は、相互の尊重を基盤として成り立つ。人々が相互に尊重し合うのは、互いの利害に関わる事柄、特に公共の事柄に参加し、自分の行いや考えの理由を相手の立場に立って

⁵⁾ 渡辺幹雄は、ロールズもまた善の構想が自我を構成しうることを認めていることを指摘している。しかし渡辺は、自我は構成的な善を相対化し、自らのアイデンティティを再構築できるのであり、サンデルがそれを否定するなら決定論ないし宿命論になると論じている。渡辺幹雄『ロールズ正義論とその周辺』(春秋社、2007)、98頁参照。

⁶⁾ Michael J. Sandel, *Public Philosophy, Essays on Morality in Politics*, Harvard University Press, 2005, p. 10. 以下 PF と略し、本文中の () 内に略号とページ数を記す。

⁷⁾ John S. Dryzek, *Deliberative Democracy and Beyond – Liberals, Critics, Contestations*, Oxford University Press, 2000, pp. 2, 10-11.

説明する過程を通してである。その過程が相互的な話し合いとなり、それが自分の善の構想や自己理解への反省を促すのであれば、熟議となる。相互の尊重としての互惠性と、共有される善についての熟議、この二つの契機が個人と共同体とを媒介する。これを個人主義か共同体主義かという二者択一の問題に単純化することは、人間と社会の現実そのものを単純化することではないか。

ロールズが「自然の義務」と見なす相互の尊重は、共同体の善として人々に認められることが可能である。するとその義務は、家庭や学校を通して、あるいは日々の人々の交わりのなかで、人々に教えられ、身につけられることができる。その場合、この善は人々のアイデンティティを部分的に形づくることになる。「自然の義務」は、契約によって成り立つものではないが、生まれつき備わっているものでもない。それは日々の人々の交わりのなかで実践されて、身につくものであろう。あるいは、社会のなかで制度化されて人々の生活を形づくり、次第に人々のアイデンティティを形づくっていくものであろう。互惠性や社会的協働という相互的／水平的な関係における善は、共同体の善となることで、人々のアイデンティティを部分的に形づくるものとなる。実際、共和主義を掲げるフランスでは、初等／中等教育のなかに「市民教育」が組み込まれ、市民が互いを尊重することが「市民の礼儀」(civilité)として教えられている。

3. 競争と消費

善を共有することは、人々のあいだに互惠性として位置づけられる場合でも、共同体の善として位置づけられる場合でも、いずれにしても、単独の個人を越えたところに位置づけられる。それゆえに善を共有することは、人間の私的な善や利己心と対抗し、それらを抑制することとしても理解できる。そして、共有された善というものを理解し、それによって自分の利己心を制御できることが、人間としての成熟に不可欠であるという考え方も成り立つ。それは、人間が人間として自己を実現するためには、他者との互惠性や共同体との関わりが切り離しがたいということであり、つまり人間は「社会的存在」であるという理解である。

しかし今日、消費社会と呼ばれ、競争社会と呼ばれる状況のなかで、人々の互惠性や共同体の存立が難しくなっている。人々は子どものころから競争にさらされ、負ければ自己責任として片付けられる。人々は自分の生活で精一杯で、他人のことまで気にかけていられない。あるいは、目の前の課題やノルマをこなすのに追われて、自分を越えた過去や未来のことまで考える余裕がない。そうした状況で、人は他者との結びつきを諦め、自分の私的世界、〈いま・ここ〉の世界に逃避し、自己完結的な満足を求めるようになってしまう。これは、すでに1979年にクリストファー・ラッシュが、『ナルシズムの文化』という本の中で指摘していたことである。競争社会において、人が自分にしか関心を持たない (self-preoccupation) のは、自分に満足している (complacency) からではなく、他者に絶望しているからである⁸⁾。人々のパーソナルな関係にまで競争が浸透しており、人間関係が長続きせず、安心できる信頼関係を育てる

⁸⁾ Christopher Lasch, *The Culture of Narcissism – American Life in An Age of Diminishing Expectations*, W. W. Norton & Company, 1991[1979], p. 26.

のが難しい。すでにフロイトは、ナルシズムを分析し、それはもともと他者に向けられた性欲動が拒絶され、撤回されて、結果的に自分に向けられることで生まれると指摘していた⁹⁾。さらにフロイトは、人が生きることは苦しみであり、特に他者との関わりから生まれる苦しみはつらいものであり、その苦痛から身を守る最も簡単な方法は、孤独を守って人から遠ざかることであると述べている¹⁰⁾。このフロイトのナルシズムの分析を下敷きにして、ラッシュは、競争社会が他者とのパーソナルな関係への絶望を生み、人々を自己防衛的なナルシズムへと追い込むと考えた。

『ナルシズムの文化』が出版された三年後、フランスではジル・リポヴェツキーの『空虚の時代』が出版された。その本では、「パーソナル化」(personnalisation) という現象がテーマになる。近代の西洋において、個人的なものを普遍的・合理的な規則に従わせるという啓蒙の理想が掲げられたが、パーソナル化とはむしろ個性の実現や自己のアイデンティティの探求を根本的な価値と見なす現象である¹¹⁾。個人を越えた普遍的なものが価値を失うとき、そこに空虚が生まれる。衆消費社会において、その空虚には人びとを圧倒するほどの過剰な商品と情報があふれる。普遍的なもの、公的なものが価値を失った「空虚の時代」において、人々は自分にしか関心がない。しかも自己を実現する手段が消費しかないため、人びとは過剰な情報と商品の中から選び、消費することに追われる。すると個人のアイデンティティとは、無数の情報や刺激が次々に映されては消費されていく「空虚な鏡」に過ぎなくなる (EV,62)。リポヴェツキーはこの本の終わりで、「わたしたちは、自分以外のもののために生きる義務のなかに、自分の姿を認めることをやめてしまった。」と述べている (EV,328)。ロールズの言う互惠性における相互の尊重にしる、サンデルの言う共同体の善にしる、人々は自分を越え出ることによって、他者と善を共有することができる。ラッシュの言うナルシズムや、リポヴェツキーの言うパーソナル化が進めば、人々は何かを共有するための回路を失い、自己に閉塞するしかなくなり、善を共有することはできなくなる。すると問題なのは、個人の権利を土台とする自由主義か、共同体における徳を賞賛する共同体主義かという選択ではない。競争と消費を煽ることで個人のアイデンティティを「空虚な鏡」に変えていく、その社会の構造をどのようにコントロールするかが、より重要な問題であろうと思われる。

結び

善を共有することは、個人の主観を越え出て、他者と善を共有することである。それは二つの次元で成り立つ。一つは、人びとが互いに尊重しあうことに現れるように、互惠性の次元である。もう一つは、人びとが帰属する共同体の善を共有することである。互惠性は、人が自尊

⁹⁾ ジークムント・フロイト「ナルシズム入門」(中山元訳『S・フロイト エロス論集』、ちくま学芸文庫、1997、所収)、236頁参照。

¹⁰⁾ ジークムント・フロイト「文化への不満」(中山元訳、『幻想の未来／文化への不満』、光文社文庫、2007所収)、150-153頁参照。

¹¹⁾ Gilles Lipovetsky, *L'ère du vide - Essais sur l'individualisme contemporain*, Gallimard, 1983, pp. 10-13. 以下EVと略し、本文中の()内に略号とページ数を記す。

心をもって生きるうえで、欠くことのできない土台となる。共同体の善は、それに帰属する人のアイデンティティを部分的に形作るものである。善を共有することは、人間が一個の人格として、自尊心をもって生きるために、重要なはたらきである。

互恵性は、人びとが互いの利益に関わる事柄、とりわけ社会的ないし政治的な協働において、現実に取り組む。また共同体の善は、人びとの熟議を通して反省的に受け継がれていくのでなければ、むしろ人のアイデンティティを歪めてしまうおそれもある。

しかし今日の競争社会、消費社会において、人びとは協働や熟議への意欲、時間的余裕、機会を多くは持たない。善を共有するよりは、消費によって自分の私的な満足を満たすことへと促されやすい。それは楽なことかもしれないが、同時に無気力に陥りやすい。人間は社会的な存在である限り、熟議や協働を通して、自分の行うことには意味があるという自尊心に支えられてこそ、満足を得られるのではないか。善を共有することの現代における意義とは、競争や消費によっては得られない満足、自分が存在することには意味があるという感覚に裏打ちされた満足を得られることにあると思われる。

*以下の邦訳を参考にさせていただいた。

ジョン・ロールズ、『正義論 改訂版』、川本隆史、福間聡、神島裕子訳、紀伊國屋書店、2011
ジョン・ロールズ、『公正としての正義 再説』、田中成明、亀本洋、平井亮輔訳、岩波書店、2004

マイケル・J・サンデル、『自由主義と正義の限界 第2版』、菊池理夫訳、山嶺書房、1999
マイケル・サンデル、『公共哲学』、鬼澤忍訳、ちくま学芸文庫、2011

クリストファー・ラッシュ、『ナルシズムの時代』、石川弘義訳、ナツメ社、1981

ジル・リポヴェツキー、『空虚の時代』、大谷尙文、佐藤竜二訳、法政大学出版社、2003

A Study of Having Good in Common

Makoto Kameki

We can have a good in common with others in two ways. One is a reciprocal way. For example, we can respect each other, and this mutual respect becomes a basis for our self-respect. The other is to share the good of the community, which is partly constitutive of our identity. To have a good in common with others is important for us in order to live as a person with self-respect.

Reciprocity is effective in social or political cooperation. We can succeed the good of a community through deliberation in a reflective way. To accept it without reflection would distort our identity.

In our society, totally influenced by competition and consumption, we don't have enough time, chance or motivation for social cooperation and deliberation. We prefer to satisfy our private desire through consumption rather than to have a good in common with others. This preference leads us into apathy. We social existence can have self-respect through cooperation and deliberation. We can feel satisfied by having a good in common, which is neither possible by competition nor by consumption. This satisfaction, proper to social beings, is based on the sense of our own worth.